

(3) 応急仮設住宅建設事務

応急仮設住宅設計・建設事務は、2016 年 6 月 3 日時点では 69 団地、3,094 戸を目標に整備が進められていた。

応急仮設住宅の設計は、「工期 1 か月以内で多く建設できる」、「2 年後も活用できる仕組みを取り入れる」、「他で見受けられた課題を改善する」といったコンセプトで進められた。

工期短縮には、「流通量が多い材料を使用する（外装版、窓サッシ、水回り機器など）」、「汎用性の高い材料を使用する（スギ 105mm 角、構造用合板 12mm 等の流通材）」、「仕上げを簡素化しなるべく手間のかからない工法を採用する」とし、新潟や東北などで鍛錬を積んできた熟練のプレハブ協会とその施工業者で行うことにより、効率的な施工を行っていた。



集会所「みんなの家」

また、2 年後も活用できる仕組みを取り入れることについては、地域の工務店協会や建築士会などのグループが担当する応急仮設群の中で、過去の阿蘇山噴火災害時の仮設住宅建設の経験から、長期に入る可能性のある仮設住宅について、期間満了後の市営住宅転換を見据え、砂急仮設住宅に使われる松杭の代わりに RC 造の基礎にする、長期に住めるようにある程度のスペックにするなどとしていた。

デザインも、くまもとアートポリスの建築コミッショナーである伊藤豊雄などにより集会所を「みんなの家」として団地の規模ごとに設置するなど、美しいデザインがアクセントを添えていた。

フローリングや腰壁に熊本県産材の木材、畳は熊本産のいぐさを使用することにより、県の産業も後押しし、かつ、居心地の良い空間を形成していた。

完成した応急仮設住宅には、6 月 15 日から入居が始まった。入居された方によると、避難所ではお互い助け合いによりやりくりしてきたが「振り返ってみると極度の気遣い等による疲労はやはり間違いなくあった」、「応急仮設住宅に入ると落ち着きを覚える」とのことであった。



内装の壁がヒビだらけの熊本県庁

各都市からの支援職員で一杯の部屋。



急ピッチでの建設現場



応急仮設住宅の一例。工務店協会。

プレハブ協会。



建築士会。

建築士会の内装は、壁にも県産材。



一般的な内装。県産材を、キッチンの床に張り、和室の腰壁も県産材。

■所感

応急仮設住宅の設計等については、これまでの地震の教訓を生かし確実に進歩していることを実感した。

応急仮設住宅の設計はコスト面の制約もあり、被災者のニーズすべてを満たすのはなかなか難しく、マスコミ等によき事例として取り上げられるケースは少ない。しかしながら、被災者の日々の生活や精神的落ち着きの根幹にかかわる重要な部分でもあり、さらなる進歩をとげてほしいと感じた。



(文責：渡田 賢治)

■地井昭夫先生追悼 10 年記念パネルディスカッション■

～今の事態を地井先生はどう見ておられるだろうか～

“農山漁村へのまなざし、都市への思い…”

基調報告：森保洋之（広島工業大学名誉教授）

石丸紀興（広島諸事・地域再生研究所）

パネリスト（基調報告者を含む）

宮本茂（中国地方総合研究センター）…進行役

岡田知子（西日本工業大学）

篠部裕（呉工業高等専門学校）ほか

日時：2016 年 7 月 9 日（土）13:30～16:30

場所：合人社ウェンディひと・まちプラザ 研修室C

主催：一般社団法人日本建築学会中国支部（農村計画委員会）

後援：公益社団法人日本都市計画学会中国四国支部

はじめに（趣旨）

最初に、日本建築学会中国支部農村計画委員会の浅井委員長より、趣旨説明があった。

地井昭夫先生は、建築家・吉坂隆正（1917-1980）に師事し、早稲田大学在学中より伊豆大島の復興計画を手がけ、「発見的手法」を主唱するとともに、当時はあまり知られていなかった船小屋の漁村集落（丹後・伊根浦）に魅せられ、漁村の空間・社会の研究を精力的に行われた。また、広島工業大学、金沢大学、広島大学、広島国際大学で教鞭を執られ、その間、漁村計画研究所及び漁村研究会を発足させ、全国各地の漁村計画、漁村の環境改善などに関する研究と提案をなされた。本催しは、こうした地井昭夫先生を偲び、没後 10 年の追悼記念として行った。



1 基調報告

最初に森保氏から「瀬戸内（祝島など）と地井先生のまなざし」と題して報告があり、地井先生の略歴から、広島工業大学での地井ゼミの集落研究、沖縄関係の主要論文、受賞、研究成果の一つの結実である図書など、まさに「地井アーカイブ」と言うべき内容であった。特に、森保氏のライフワークでもある祝島の研究に関しては、地井先生の沖縄の集落研究などと関連づけ、興味深い論考があった。最後に、「地井先生は瀬戸内海の漁村等の現状、それに対する研究や取組を如何にみているか」という視点から、そのまなざしに思いを馳せることは、我々の「考え方の基本・物差し」、そして「考えるテキスト・行動指針」につながることを強く語られた。



続いて石丸氏から、地井先生の研究スタイルや着眼点などについて、具体的な調査対象などを織り交ぜながら報告があった。その中では「発見的方法を考案し、それを通じて各地の農山漁村の特性や課題を発見し、計画・事業につなぐ研究者・プランナーとしての希有な存在であったこと、また、周防灘大規模総合開発や下笠（しもうけ）ダム（大分県と熊

本県にまたがるダムで 1972 年竣工）の反対運動「蜂の巣城紛争」に関する地井先生のまなざし・行動なども紹介された。

2 パネルディスカッション

まずは、司会・コーディネー

タである宮本氏から、「広島を中心とした地域計画・農山漁村から」と題して、瀬戸内海の島嶼部、中山間地域、そして都市近郊における数々の研究や地域計画について報告があった。宮本氏の農山漁村、そして都市への好奇心や着眼点は、地井先生からの影響も大きいことなどを知ることができた。

次に、岡田氏からは、「海の視点から住まいの遺伝子と集住文化を探りたい」として、地井先生の島との出会いを、1965 年の伊豆大島（元町大火後の復興計画）から、瀬戸内の島々（波止、集落、水軍、宮本常一）、沖縄県・本島と島々（復帰後の都市・集落振興計画）、能登半島（海女の家族）、奥尻島（北海道南西沖地震被害と復興）、淡路島（阪神淡路大震災と復興）、福岡県宗像町（現・宗像市）・沖ノ島（宮司一人の島、訪人の島）、晩年の韓国・鬱陵島（海封された島、海女、ドンドンジュ[どぶろく]）の 8 つの出会いとして説明された。そして、海には経済や文化の通り道（海の縁側）があり、長い歴史の中でリージョナルな交流や滞留があったこと、その中の大切なこととして船住まいの伝搬と陸上がりがあることなど、地井先生の論考が示された。

続いて、篠部氏より、地井先生との共同研究「中山間地域の地域振興に関する基礎的研究－在住者と出身子女からみた将来像と課題」の報告があった。こうした着眼点や共同研究は、両氏の先見性と意思疎通の深さを如実に物語るものであるとともに、地域振興への展開が期待される。

基調報告者の石丸氏からは、灰塚ダムや地井先生の日常生活のエピソードなど興味深い話があった。灰塚ダムの再建地に関しては、住民参加型の計画策定プロセス、地区の中心地から伸びる軸線上への神社の配置、小学区の立地性など、石丸氏の発想が結実したものであるが、「地井先生はこの再建地の計画をどのように見ておられるだろうか」との問いかけに、この催しの本質的な意味を感じることができた。

3 意見交換・フリートーク

地井研の卒業生などからは、漁村での調査、前述の下笠ダムでの体験、赴任当初は学生と間違われていたこと、大学生生活のこと、愛車ハーレーダビッドソンのこと、酒をこよなく愛されたことなどが昨日のように語られ、連綿と続く地井先生の存在の大きさを感じるものであった。

おわりに

この催しに参加できなかった方からも声が寄せられている。「東日本大震災が惹起した時、何故か直ぐ地井先生を思い浮かべました。（中略）地井先生だったらどうされるだろうかと思ったのです。」「いやな思いをした記憶がありません。不思議な人です。」「『チイザクラ』と名づけたサクラが家の裏にあり、毎年花見をしています」等々。

（文責：山下和也）



2 華山 1914 文化創意園区

華山 1914 は、1914 年創立の日本酒を製造している玉山酒造が移転した跡地の建物を、まさにそのまま使って、カフェ、ギャラリー、雑貨屋、イベントスペース等に使ったオシャレスポットだ。若者がとても多い。

イベントの内容も、となりのトトロや日本の漫画やら日本色が濃い。入っているショップもオシャレなレア系、食事もある日本の食堂をイメージしていたものが入っていた。

建物は、カラミレンガやタイルなどを窓枠などにもふんだんに使っており、工場だが、重厚な感じがする建物だ。壊れている部分や汚れたのを味としてそのまま使い、いくらかリフォームをして使っているのととても味がある。



工場がイベントホールとなっており、長蛇の列だ。



煙突付で蔦に覆われた建物が可愛い雑貨屋に。タイルが剥がれた場所が芸術に。

3 錦安日式宿舎群落 (総督府山林課宿舎)

錦安里の金山南路二段 203 巷と 215 巷の辺りに群落で残っている、総督府山林課の官舎がある。

現在、1 軒ずつ復元されているようである。活用方法は分からなかった。

近くに公園があり、そこに建築物の構造や復元方法などを記したパネルがあった。



腐らないように鉄骨で屋根までかけて保存されている。

4 四四南村眷村文化館

これは日式建築ではなく中国式だが、戦後中国から入ってきた軍関係の官舎で、中国系の古いアパートの集落だ。

資料館があるほか、土日はアートパフォーマンス等が催されているようだ。ちょっと早朝平日だったので、静かだったが、休日は賑やかだとのこと。

資料館があり、住んでいた当時の記録や芸術家による住民を写した写真展などを行っていた。



台湾のタワー的存在である台北 101 のすぐ脇に古い集落という対比が面白い。



4 鉦山の町、金瓜石

台北駅から電車で暫く行き、そこからさらにバスで山の中に入ったところに金瓜石の町はある。千と千尋の神隠しで有名な九份より少し奥に行った感じだ。

その町は、鉦山の町で、やはり戦中に日本による開発が進められたため、日本家屋が多く並んでいる。

観光も進められているようで、エリア一体を博物館区として、黄金博物館や鉦山を見学でき、作業員弁当を眺めの良い食堂で食べることができ、建物をボランティアガイドに説明してもらえることができたりする。

当時の日本人職員の宿舎である四連棟は、1930年頃のものだが、2005年に台湾で教えている日本人の教授の監修で修繕を行い、2007年から見学ができるようになっている。

日本人が住んでいたころの内装、戦後の内装などが復元されており、それぞれ郷愁をあおる。

太子賓館は、後の昭和天皇が皇太子だった頃に視察の計画があり 1922年頃に建てられたものだ。



太子賓館。立派。



三毛菊次郎邸。現在改修中でした。そのうち見学できるようになるのかも…



坑道も見学できます。鉦山マニア垂涎～。ただ、入り口でかなり脅されます…



1970年頃のバスが置いてありました。建物が朽ちているところでも塀はある。



鉦山群の下町。「非情城址」という映画の撮影場所にもなったとのこと。ここから少し離れたところに戦時中の強制収容所跡があり、公園となっていた。

最初にビデオを見て、ガイドと共に巡回する。当時の暮らしが目に見えるよう。

5 最近の台湾人気ナンバーワンスポット、九份

九份というと、「ああ、あの『千と千尋の神隠し』の…」と思われる方も多くいらっしゃるだろう。

九份に行くことを目標に台湾に来られる方も多いようだ。

千と千尋の神隠しの映画の中に入り込んだような空間を楽しんだり、古い建物で高級茶を飲んだり、屋台を楽しんだり…しかし、人が多いのは辟易する…



6 公共建築物群

台湾で素晴らしいのは、戦前戦中に建てられた日本統治時代の建物が、そのまま現在も現役で使われていることだ。

台湾駅の南側の博愛区に、中央官庁群があるのだが、かなりの数が日本統治時代の建物で、かつ美しいのだ。

台湾総統府として、司法院や台湾医大、台湾博物館…それを鑑賞するだけでもおなか一杯になること間違いなし。

勿論、博愛区以外にも、あちこちに公共建築物が残る。



台湾総統府。中華民国総統が執務を行う官邸。予約すると見学できるとのこと。



司法院。中華民国の最高司法機関。緑色タイル張りで、シックな美しさがある。



台大医学院休館（1921年築、設計台湾総督府営繕課 近藤十郎）現在も病院。



台湾師範大学。教師の官舎の多い青田街の近く



国立台湾博物館。1908年築。ギリシャ風。1889年築造台湾初の洋風公園に建つ。

7 交通事情

交通はかなり便利で、移動が苦にならない。

まず、MRT (地下鉄) がかなり整備され、乗り換えが同じプラットフォーム上でできるなど、工夫されている。東京のように乗り継ぎが大変なことはない。



鉄道は新幹線も整備され、台湾内を安価に高速で移動できるようになっている。台湾駅の日中の状況だが、大きな中央広場に、電車待ちの人々が大量に座っていたのはびっくりした。



道路にバイクや自転車の区画があり、整頓されている。



写真右側に見て取れる通り、バスレーンが道路の中心に設けられているため、バスのための渋滞や車やバイクとの混戦がなく、かなりスムーズだ。また、左側に見て取れるように、広幅員道路には高架の車専用道があり、交差点を苦にせず遠距離を移動できる。また、高架下は、ガソリンスタンドや二階建て駐車場が整備されている。

8 その他

旅のだいご味、屋台。夜市があちらこちらに立つ。公設市場の屋台もあり、観光スポットになっている。観光マップに載っていないような住民の胃袋的な屋台街もある。



清時代の建物もあちらこちらに残っている。下の写真は剥皮寮歴史地区、龍山寺だが、他にも時間をかけ探索したいところが多い。勿論、寺関連の市場や観光用市場、夜市など、夜に行っても楽しめるところが満載だ。

また、食べ物も、薄い塩味がメインの日本人に嬉しい優しい味が多く、屋台で食べても大体はずれがない美味しさで、かつ安い。最近では、カキ氷が有名なように、スイーツも様々で美味しい。



また、今回は、現代建築を廻らなかったが、日本の建築家も多く台湾で建築しているとのこと。これもまた次回見て回ってみたい。

台湾観光は、現在日本人に人気で多く台湾に来るようだが、台湾の方が日本に来る割合が大きいとの事。また、日本統治時代に嫌な思い出のあるお年寄りですえ東北大地震時に寄付を 100 万円単位でしてくれるほど、愛憎含めて日本を気にしてくれている国であり、温厚で物静かな方が多い。

台湾は来るたびに、またすぐ来たいと思う国だと思う。

